

# 学校所属感および欠席行動に対する対人関係変数間の交互作用 —PISA2015 データの分析を通して—

Hou Yuejiang (北海道大学大学院・日本学術振興会)

キーワード：学校適応，学校所属感，いじめ

### 問題と目的

ソーシャルサポートは児童生徒のメンタルヘルスを維持する要因である(村山ほか, 2016)。親、教師、友人などの対人関係が学校適応感の規定要因であるが、その要因間に交互作用も確認されている。例えば中3の生徒において、親子関係が不安定であっても、教師関係と友人関係に満足することが補償的に働き、学校への適応につながることを示されている(林田・黒川・喜田, 2018)。ただし、数校を対象にした小規模なサンプルでは結果の一般化が難しい。また、欠席行動において同様の結果が成立するかは未検討である。

そこで本研究では層化二段抽出による大規模調査のデータによって、対人関係が学校適応感と欠席行動に及ぼす影響を検討する。

### 方法

#### 調査対象者

OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) における日本の 2015 年のデータを利用した。高校 1 年生 6647 人が対象であり、調査時期は 6~7 月であった。

#### 測定変数

**無断欠席回数** 最近 2 週間のうち、無断欠席した回数 (1 項目 4 件法)。

**学校所属感** 6 項目 4 件法。項目例：学校ではよそ者だ(またはのけ者にされている)と感じる (R)。

**認知された親からの情緒的サポート** 4 項目 4 件法。項目例：親(もしくはそれに相当する人)は、私が学校でしている活動に関心がある。

**認知された教師の不公平さ** 6 項目 4 件法。項目例：先生が話しかける回数は、他の生徒より私のほうが少なかった。

**学校でのいじめ被害経験** 6 項目 4 件法。項目例：ほかの生徒から仲間外れにされた。

### 結果と考察

親からのサポート、教師の不公平、学校でのいじめ被害およびそれぞれの一次交互作用項を説明

変数として、無断欠席回数を目的変数としたポアソン回帰分析と、学校所属感を説明変数とした重回帰分析を行った。

分析の結果を Table 1 に示した。学校所属感と無断欠席に一貫して、生徒に認知された親からの情緒的サポートと学校でのいじめ被害経験は有意な主効果があった。

交互作用に関して、教師の不公平と学校でのいじめの交互作用が学校所属感、無断欠席回数の両方で有意であった(それぞれ  $b = -0.082$ ,  $b = 0.015$ ,  $p < .001$ )。いじめを多く受けている生徒は、教師から不公平に扱われると、学校所属感がさらに低下するが、教師が公平に対応していれば、学校所属感の低下がある程度緩衝されることが示された。

Table 1 学校所属感と無断欠席数に対する偏回帰係数

	学校所属感	無断欠席数
親のサポート(A)	0.297 ***	-0.014 **
教師の不公平(B)	-0.006	0.004
学校でのいじめ(C)	-0.301 ***	0.009 *
A×B	-0.010	0.005
A×C	-0.016	-0.008
B×C	-0.082 ***	0.015 *

注：説明変数が中心化されている

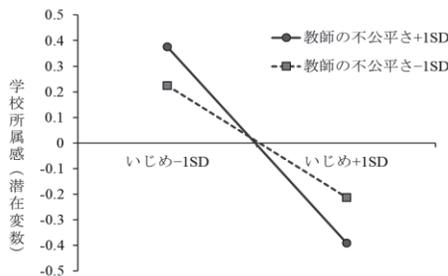


Figure 1 学校所属感に対して教師不公平といじめの交互作用